

ベオグラード 2022 世界室内陸上競技選手権 トレーナーレポート

砂川 祐輝 (Well 鍼灸整体)

公益財団法人 日本陸上競技連盟 医事委員会 トレーナー部

ベオグラード 2022 世界室内陸上競技選手権は、3月18日から20日の日程でセルビアのベオグラードにて開催された。選手団は選手7名（男性5名、女性2名）、コーチ1名、渉外1名、医師1名、トレーナー1名であった。

東京2020大会以来、初めての国際大会で、新型コロナウイルス感染症（COVID-19）の影響が未だ残る中での遠征となった。出国当日は、成田空港で集合後にPCR検査（鼻咽頭ぬぐい液 RT-PCR法）を受け、陰性結果を確認した後に渡航した。

<メディカルスタッフ>

- ・ドクター：田原 圭太郎
（医事委員会医事 専門：整形外科）
- ・トレーナー：砂川 祐輝（トレーナー部部員A級）

<現地情報>

日中の最高気温は10℃前後、最低気温が3℃前後で朝晩は特に寒く感じられ、ウォーマーが必要であった。湿度は30%前後と乾燥しており、部屋での乾燥対策のアナウンスを行った。

World Athleticsより今大会のCovid-19プロトコルについて、新型コロナウイルスワクチンを3回接種済みの場合、現地滞在中の検査は免除された。同ワクチンの接種が3回に満たない場合は、ADカードを受け取る前にPCR検査を受け、その後48時間毎のPCR検査が義務付けられた。

<宿泊先>

東京2020大会と同様にバブル方式が導入され、大会会場、練習会場、宿舎と限定された行動規制となっていた。またN95マスク装着が推奨されており、日本から持参したものを配布し使用した。選手の部



図1. 宿舎の食事会場

屋はシングルルームであり、広さも十分であった。浴槽はなくシャワーのみであった。

食事は宿舎内のレストラン（図1）で朝食、昼食、夕食共にビュッフェ形式であったが種類が少なく、パターンもほぼ同様であった為、選手は飽きていた印象であった。

<現地でのトレーナー活動>

- ・宿舎
オフィシャルのフィジオルームの設置があった為、利用時間を予約しマッサージベッド持参の上で活動した。時間外はトレーナー居室にて対応した。
- ・大会会場及び練習会場
練習会場では特定の場所は無く、チーム待機付近にマッサージベッドを設置し活動した（図2）。大会会場では、各国毎にチームテントが割り当てられており、そちらを利用した（図3）。1つのテントに複数の国が割り当てられており、マッサージベッドを1台広げると極端に狭いスペースであったが、他国の利用が無かった為、日本チー



図 2. 練習会場でのトレーナー活動の様子



図 4. 大会会場



図 3. 大会会場のチームテント

ムのみで使用できた。

・ トレーナー利用数

帯同中のトレーナーの延べ利用数は男性 22 名、女性 9 名の総計 31 名であった。処置別の内訳はマッサージ 31 件、ストレッチ 28 件であった。大会期間中の怪我はなく、全選手が試合に出場することができた。

< 帰国後の流れ >

厚生労働省より水際対策措置に準じた。日本に帰国する際には新型コロナウイルスワクチン接種証明書と現地出国時の PCR 検査陰性証明書の提示、入国者健康居所確認アプリ（以下、MySOS）へ情報の反映が求められた。

< 所感 >

新型コロナウイルス禍での海外遠征であり、選手

及びスタッフのワクチン接種状況により様々な対応が求められた。成田空港での出国前 PCR 検査は、陽性になると出国できない事態になることに加え、検査結果の判明までに 3～4 時間かかり、選手団一同が落ち着かない時間を過ごした。セルビア入国後も、ワクチン接種状況により、48 時間毎に PCR 検査を行わなければならなかった選手やレースのラウンド中に帰国前 PCR 検査を受ける等、検査によるストレスを選手各々が感じていた。また、海外遠征が初めての選手には、今回の遠征における留意点（時差対策や機内での過ごし方など）を伝え、コンディション調整をフォローした。今回はコーチが少なく、練習で試合会場（図 4）と練習会場に選手が別れる場合は、ドクターと相談のうえ、メディカルも二手に別れて活動した。ホテルに戻った際に食事時間を利用してメディカルスタッフ間での情報共有を行った。大会中は各国のチームテントから試合会場まで距離があったため、トレーナーはチームテントで待機し選手対応を行った。ドクターには、ウォーミングアップ会場と試合会場を行き来していただき、選手の状況などを共有していただいた。

遠征中に体調不良者が出る事はなく、また帰国時の成田空港での PCR 検査でも全員陰性でメディカルスタッフとして安心して遠征を終えたつもりであった。しかし、帰国翌日に「コロナ感染者の濃厚接触者である」という通知が MySOS 経由で数名の選手、スタッフに届き、該当者は急遽自主隔離の対応をとる事態となった。濃厚接触者に該当しないような対応は難しいと考えられるが、これもコロナ禍での活動のリスクの 1 つと捉えれば、感染予防を徹底して活動していく重要性を再認識した機会となった。